8年目の夕焼け

グルバハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
８年目の夕焼け

【Ｎコード】
Ｎ１１２９Ｕ

【作者名】
グルバハ

【あらすじ】
２９歳。人生の岐路に立っている僕は、大学時代に交わした約束を果たすため、同級生と再会する。
それぞれが岐路に立ち、悩みを抱えている。
最後の青春を過ごすため、必死でもがいている若者たちの物語。

プロローグ

僕はいくつもの約束を破ってきた。
幼少期に幼馴染みと交わした結婚の約束。
親友だった者と交わした夢（もう、どんな夢だったかすら忘れてしまった）についての約束。
昔の恋人と交わした『ずっと一緒』という約束も。

そんな僕が、いま約束を一つ果たそうとしている。
八年前に交わした、再会の約束を。
そう、八年前の五月、夕焼け空の下で交わした、他愛もない約束を
僕は果たそうとしている。

記憶のゴミ箱から拾い上げた、その約束を両手に抱えながら、僕は
車を走らせる。

幸太郎　1

雄大に連なる山々に目をやると、思わず「帰ってきたんだ」と呟いた。

高速道路から見える、この山々を初めて目にしたのは、もう１２年も前のことだと思うと、どこかくすぐったい。

大学受験のために地元の駅から高速バスに乗って、この風景を眺めながら、ひとり、見ず知らずの土地への期待と不安がない交ぜになった心で、この道を走っていた。

目に入ってくる風景は、昔と何一つ変わっていないように思える。１２年という歳月は、僕らにとっては長すぎて、自然にとっては短すぎるのかも知れない。

思えば、その時の僕は車はおろか運転免許すらもっていなかったのだ。

しかし、風景は変わっていなかった。すこしだけ、ほんのすこしだけ安堵し、その後すぐに悲しさがこみあげてきた。

もう１２年が経ってしまったのだ。

パーキングエリアに入り、すこしだけ休憩をとることにした。

ここには、全国的にも有名な牛乳プリンが売られている。牛乳が苦

手な僕でも、平気で食べられた。
売店で、それを一つ買い、外のベンチで食べる。
食べ終わり、胸ポケットから煙草を取り出し、１００円ライターで火をつけると、売店の店員に注意された。

新しく喫煙所ができたらしい。
これは、１２年前とは違う。
そもそも、高校生だった僕は煙草を吸っていなかったはずだ。

煙草を吸うようになったのは、たしか、大学一回生の時だったはずだ。
詳しいことは思い出せないが、その時はセブンスターを吸っていたはずだ。それも、一番きついものを。
今では吸えないな、と自嘲気味に小声で呟き、ケントの煙を吐き出した。

以前はフィルターぎりぎりまで吸っていたが、今では半分位で捨ててしまう。
大学時代の僕が見たら、どう思うだろうか。

きっと「もったいねぇなぁ」とでも言うだろう。

煙草を買う金にすら不自由する。そんな学生生活だった。
煙草の値上がりの際には、１ヶ月のバイト代の半分を費やし、買いだめをしていた。
馬鹿馬鹿しくて、笑えてくる。

だが、あのときは必死だったのだ。きっと、漠然としたもどかしさと戦っていた。毎日毎日、戦っていた。

昔は、前ばかり見ていた。そんな気がする。振り返られるほど、長く生きてはいなかったし、そんな余裕も無かった。

昔のことを思い出すようになったのは、ここ最近のことだ。
きっと、振り返っても出発点が見えないくらいには、長く生きてきたのだろう。
少なくとも、『昔は』なんてことは言っていなかったはずだ。

煙草の火を揉み消した瞬間、ふと思い出した。
煙草を吸うようになったのは、健吾の影響だ。

おそらく、大学時代、最も長い時間を共にしたであろう、長井健吾。
彼が僕に煙草を教えたのだ。

ここに長居するつもりは無かったが、記憶が濁流のような勢いで溢れだしてきたので、それを整理するために、コーヒーを買い、二本目の煙草に火をつけた。

皐月　1

煙草に火をつける。煙を吐き出す。灰を落とす。そんな動作すら億劫だった。

大学時代、幸太郎に『万年五月病』という不名誉な渾名をつけられた性分は、１２年たっても変わってはいない。

おまけに名前が森川皐月だから、本当に笑えないジョークだな、と自嘲しながら重い腰をあげた。

連日の徹夜で、目の下にはうっすらとくまができている。パソコンのディスプレイに映る自分の顔を見てみても、１２年前の自分を思い出すことができる。

化粧はルージュなどから、ファンデーションに金をかけるようになり、飲み物は抹茶オレからリポビタンＤになった。

老けたな、と思う。

何気ない日常に疲れ、歳をとったのだ。

おそらく、あの無意味であったと思っていた、大学生活が私を支えている。

空虚であると思っていたものが、今の空虚な私を支えている。

１２年前に交わした、下らない約束が、今の下らない私の生活の杖

になっている。

今日、その杖が折れる。

そう考えると、じっとしていられなくなり、一旦、デスクを離れ、屋上へ向かった。

屋上へと続く、細く、薄暗い階段を登りきると、この時期にしては元気すぎる太陽が顔を見せていた。踊り場にある自販機で、ブラックコーヒーを買い、プルタブをひく。口一杯に缶コーヒー特有の苦味が広がる。

酒を飲んだ時は、大体こうだった。皆で、騒ぐだけ騒ぎ、幸太郎の家のベランダで朝日を見ながら、安酒をあおり、眠りにつく。

大学生活を振り返ると、出てくるのは、そんな下らない思い出ばかりだ。

大学の講義はもちろん、学園祭のことも、ほとんど思い出せない。

ふと、アルミ缶のプルタブをとると、モヒカン頭のお笑い芸人の顔にそっくりになる、と幸太郎が言っていたことを思い出した。

『本当に下らないなぁ』内心そう思いながら、プルタブを千切ってみたが、そのモヒカン頭の芸人の顔とは、全く似ても似つかない。

若干の戸惑いを抱いたが、すぐに理由がわかった。

私は今、缶コーヒーを飲んでいるのだ。スチール缶では、芸人の顔

に似ないわけだ。

そういえば、ブラックを飲むようになったのも、大学を卒業してからだ。そもそも、コーヒーが飲めなかったのではないか。

記憶の糸を手繰り寄せれば、手に触れられるが、綺麗なまま残しておきたい、という防衛本能が働いてしまい、そこで思考は停止した。

とにかく12年という歳月は長く、重すぎたのだ。

そんなことを思いながら、重い体を引き摺るようにして、デスクに戻った。

友美　1

重い目蓋を無理矢理こじあけ、朝食の並ぶテーブルへと向かう。
まだ、昨日の酒が抜けきっていないせいか、胃の辺りに言い様のない不快感を携え、やっとの思いで椅子に腰掛ける。
昨日は、職場の飲み会があり、無理矢理、三次会まで参加させられた挙げ句、酔いつぶれた同僚の介抱までさせられた。

「大丈夫？」

下がりかけた目蓋のブラインドが浩司の声で、引っ張りあげられる。

「うん、大丈夫」

素っ気なく返すと、浩司がしょげかえっていた。

なぜ、こんな男と結婚してしまったのだろう。
自分のことを『主夫』と名乗るこの男は、仕事を捨て、家庭を選んだ。

「友美ちゃんは、仕事したいんだろう？」

この男が、こう言ったことで、私は仕事を続けざるを得なくなった。
確かに、仕事は嫌いでは無かったし、結婚前の話し合いでも私は、仕事を続けたいと言っていた。

しかし、子どもを授かったのなら、話は別だ。育児もある。
いくら、女性の地位が向上したからといっても、子どもを産めば、出世は諦めざるを得ない状況は依然として残っている。

なのに、この男は、自分が仕事をやめ、私に仕事を続けさせた。

私の断ることのできない性格を見透かし、自分は『妻子のために一流企業を辞めた良い夫』という独善的な仮面を被っているのだ。

しかし、私は知っている。
浩司が同期入社の者たちとの出世レースで後塵を拝していたことを。
それどころか、リストラ候補にあがっていたことも。

だけど、言わなかった。
いや、言えなかったのだ。

浩司は、もう二歳になる娘の翔子と遊びながら、私の機嫌を確認するように視線をこちらに向けてくる。

だから、この男は。
だから、この男は。
だから、この男は。

ぼんやりとした頭で反芻する。

この、貧乏くじ。
この、貧乏くじ。
この、貧乏くじ。

「早く食べないと、魚固くなっちゃうぞ。そんなに体調悪いのか」

浩司が心配そうな面持ちで、言う。

「ううん、大丈夫。ありがとね」

全く食欲は無かったが、箸をとった。

私にとって、この１２年は短すぎた。
断れない性格は直らず、貧乏くじばかりひく運のなさも変わっていない。

せめて、今日の約束を覚えていた友人たちが変わってないことを願いながら、名前のわからない焼き魚を胃に押し込んだ。

健吾　1

人は心に魚を飼っている。

魚は綺麗すぎる水でも生きられないし、汚れきった水でも生きられない。

たとえば、淡水魚が海水で塩分を排出できず、死んでしまうように。
海水魚が、淡水で塩分を取り込めず、死んでしまうように。

綺麗すぎず、汚すぎず。濃すぎず、薄すぎず、それぞれがそれぞれにあった水を求める。

人の心は、それと似ている。

ふとしたことで、その均衡が破れ、魚は死に、腐臭が漂う。

だから、私たちは必死にバランスを保とうとする。

自分たちの魚を、殺してしまわないように。
自分たちの心が死んでしまわないように。

健吾は思う。
心に棲む魚を殺さないために、染んだ魚の目をして生きていくのも悪くはない、と。

目を覚ましても、そこは教室だった。
睡眠のトンネルを抜けても、雪国に着くことはなく、眼前には見慣れた風景が広がっていた。

社会学について、淡々と話す教授。必死にノートをとる者。携帯電話を操作する者。睡眠を貪る者。
それぞれの心に棲む魚は今日も無事だろうか。

隣に座る幸太郎に目をやる。
相変わらず、真面目にノートをとりながら、教授の言葉に耳を傾けている。

どうして、こんなことができるのだろう。
健吾は感心と侮蔑が入り交じった感情と、授業の残り時間をもて余しながら、思った。

「俺たちはどこへ行くんだろうな」

声にならない声で呟き、また、目を閉じた。

幸太郎2

「俺達、どこへ行くんだろう」
「わかんなーい」
隣に座る皐月が、素っ気ない言葉を嬉々とした表情で言う。
この絶妙なバランスが、良い。

道案内を引き受けたはずの健吾は、地図を隣の友美に渡し、呑気に煙草を吸っている。
行き先不明のレンタカーは、同じような山道を、ただただ、進んでいく。

「海に行こうって言ったのに、山ばっかりだけど、どうする」
「いいじゃん。私、山好きだし」
普段は出不精なくせに、一度、外に出ると、そこがどこであっても楽しめてしまう。
それが、皐月の性分だ。
一方、僕はというと、計画通りに物事が進まないと、うろたえてしまう。

「それにしても上手くなったよね、運転」
運転免許証を持っていない皐月に言われるのは、どこか釈然としない部分があったが、素直に喜ぶことにした。
「もうすぐ、海的な場所に着きそうな気配を感じる」
後部座席に座る健吾が、いかにも軽薄そうな口調で主張する。

「海的な場所って何だよ」
「不粋なこと聞くなよ」

「健吾の考えてる粋は多分、間違ってるよ」

友美が呆れた顔で言う。

「これぞまさに大学生って感じだね、健吾は。若いよね」
１９歳の皐月が言う。

「いや、だって、大学生だし」
健吾が珍しく正論を言ったので、車内は歓声に包まれた。

結局、最後まで海には到着出来ず、近くの公園でバーベキューをしたはずだが、あまり覚えていない。

こうやって、僕らの十代最後の夏は、とりたてて何もなく、ただ、楽しかった、という漠然とした
感覚を残して、終わった。

楽しかったはずの記憶を引っ張りだしてみると、案外、くだらない。
くだらない。
くだらない。
本当に、くだらない。

しかし、あの車のハンドルを握っていた僕は、きっと幸せだった。
だから、僕は、あの日と同じ型の車を運転しているのだ。
ほとんど内装も色も同じバンを。
健吾が「皆で、旅と言えばバンでしょ」と言い、皐月が「この車は、白じゃなくて真珠色だから」と、よくわからない主張をしていた。
その真珠色のバンのハンドルを握っている。
あの時と一緒だ。

ただ、何かが違う。
違和感と言うのも大袈裟だが、どうも過去と重ね合わせることが出来ない。
そこで、もう戻ることが出来ないんだ、と気付く。

『３００メートル先、左方向です』
感傷的な気分になっていると、カーナビから聞こえる無機質な声が、道案内をしてくれた。

ふと、違和感の正体に気づいた。
そういえば、あのレンタカーにはカーナビなんて無かったよな。そんな事を思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1129u/

8年目の夕焼け

2011年11月8日04時11分発行